

令和5年度幼稚園学校評価（四絡幼稚園）

分野	評価項目	評価の着眼点	自己評価		学校関係者評価		評価結果を踏まえた今後の取り組み
			達成及び取組状況	評価	評価	評価	
教育課程・指導	①学年・学級経営	教職員は、教育目標の達成を目指した学級経営を行っているか。	教育目標に基づいた学級経営案、毎月の指導計画、保育の構想を立案し、保育実践に努めた。学期ごとに学級経営を振り返り、目標に照らし合わせて成果と課題を分析し、次につなげるようにした。また、月ごとの指導計画は、幼児の姿や遊びの取組からその都度見直し、幼児の興味関心と教師のねらいをすり合わせ、実行するように努めた。教育活動について、保護者評価からも理解されていると捉えている。	3	3	他学年の指導計画を基に保育の構想・指導・評価について互いに学び合うようにする。園から発行するたよりや保育公開を通じて園の取組について周知する工夫を講じる。	
	②幼児理解	教職員は、一人一人の幼児の発達の姿から課題を捉えて保育を行っているか。	日頃から、担任間で保育や子どもについて情報共有し、幼児の育ちや課題を多面的に捉えるように努めた。今年度は、「つながるトーク」と称して、遊びの場面の写真を基に補助教諭も含めた学級内の職員と話し合う機会を設けた。支援の方法を探りながらチームで支えるように努め、幼児理解を深めることにもつながった。	3	3	保育の実践記録や個人記録を継続し、幼児理解に努める。「つながるトーク」を積み重ね、学級内の職員とも保育を語る時間を組み入れ、学級内の幼児について共通理解を図るようにする。さらに担任間で他学年との情報共有を行い、縦と横の連携から幼児理解を深める。	
	③特別支援教育	特別な支援を必要とする幼児の実態や課題を明確にし、計画的・組織的に指導を行っているか。	専門機関(療育、市指導員、心理士)や保護者との支援会議を通して、幼児の発達や支援の在り方について連携を図った。 個別の指導計画や支援シートを基に学級内での援助について共有し、学級の幼児が互いに育ち合えるような学級経営に努めた。 就学先との情報共有や年中児から保護者に就学を見据えた情報提供を行うことで、安心して就学に向かえるようにつなげていった。	3	3	幼児の実態や保護者の思いを把握し、支援を要する幼児(外国籍幼児)を含め、すべての幼児が安心して園生活を過ごせるようにチームで支える保育を実践する。 また、一人一人の幼児のよさが生かされる集団作りや共に育ち合う保育について、保護者への理解を図っていく。就学に向けて年中時より関係機関との連携に努める。	
	④人権・同和教育	教職員は、自らの人権感覚を磨き、幼児に人権意識の芽生えを培うように配慮しているか。	鳥根県人権教育実践モデル園事業の指定を受け、幼児の思いの伝え合いに視点をあて、一人一人が安心して自分の思いを発揮し、集団の中で互いのよさや違いを認め合える仲間作りの実践を積み重ねた。人権教育講演会や地域の研修会、多文化共生の取組などに参加したりすることで、自分自身の課題を見つめ、職員、保護者共に人権意識の向上に努めた。	4	4	1年間実践した成果と課題を踏まえ、日頃の学級経営や保育実践に取り組み、四絡地区同和教育研究指定事業2年目となるので、地域や校区内の学校部会と連携を取りながら取組を進めたり、保護者も巻き込んだ活動や研修会を継続したりして人権意識を高めていく。	
	⑤行事	教職員は、行事を幼児の発達を促す機会と捉え、工夫、改善しているか。	運動会、生活発表会、絵本展など、行事のねらいや内容を話し合いながら、日頃の遊びや体験からテーマをもって工夫して取り組んだ。幼児が主体的に取り組む、活動を通して喜びや自信、達成感が味わえるような体験となるように、指導計画を基に見通しをもって取り組んだ。4年ぶりの全国児開催とし、異年齢の交流も大事にした。 保護者アンケートでも高評価から行事を通して我が子や他学年の幼児の育ちを保護者に理解してもらえたと感じている。	4	4	今年度の反省(工夫と課題)を基に、来年度のもち方、内容を検討する。幼児期に必要な体験の機会となるように、今後も長期の指導計画を基に見通しをもって構想や実践に努め、一人一人の幼児の育ちや学びにつながるよう配慮する。	
	⑥保幼小連携	近隣の小学校等との連携を密にし、なめらかな接続に努めているか。	就学予定先3校との連絡会への参加や情報提供を行い、連携に努めた。 四絡小、三中の交流では、遊びや活動を通して子ども同士が関わることで、就学への期待と憧れが高まった。保育園との交流が再開し、年長児同士が親しくなるきっかけとなった。また、人権教育の取組の情報発信として、研究会での保育公開や講演会に校区内の保小中から参加してもらい、連携を図った。	3	4	引き続き、人権教育に基づく取組を継続し、校区内の小学校、保育所と情報共有しながら、連携、交流の在り方を探っていく。 アプローチカリキュラムの見直しを図り、来年度へ活かしていく。	
家庭・地域との連携	⑦家庭・地域との連携	幼稚園と保護者、幼稚園と地域(未就園児等)との協力関係はできているか。	全保護者が一人一役を担い、環境整備などの協力を得ると共に、行事の手伝いにはボランティア制を導入し、参加の工夫を図った。子育て座談会「ほっこりルーム」の開催は、保護者同士のつながりの場となった。また、親子の触れ合いを目的とした活動や保護者研修など人権教育の取組にも協力的であった。保護者の肯定的評価も前年より2割アップしている。 地域との連携については、地域の外部講師による指導や地域への園外保育などを保育に繋げることができた。未就園児教室は、遊びの提供や健康教室、就園前の親子の交流の場としての役割を果たすことができた。	3	3	孤立しがちな保護者の悩みや不安を軽減できるように、今後も子育ての情報交換や保護者同士の繋がりができる場や機会を継続していく。 来年度も人権教育を基に据えた保護者研修やPTA活動を継続し、人権意識向上を図る。 地域のよさを有効的に活用できるよう職員研修を行い、幼児を取り巻く人や自然、文化とのかかわりを通して、幼児の体験を広げていけるような活動や保育の計画、実践に努める。	
研修	⑧研究・研修	教職員一人一人が、園内外の研究・研修の機会を自己研鑽の場として受け止め、進んで研究・研修に取り組んでいるか。	年間を通して全学級が園内研究会を実施し、県同和教育課指導主事、市幼児教育指導員から人権教育に視点をあてた取組や保育の構想、環境の構成や教師の援助について指導を受けた。11月には人権教育実践発表会を開催し、全学級が公開保育を行った。実践発表、研究協議を通して、県内約70名の参加者から幼児理解や教師の指導性など多くのことを学び、貴重な研修の場となった。	3	4	園内研修を通して園全体の保育の充実を図るよう努める。学級での話し合いの工夫や「つながるトーク」による事例の検証など、全職員が取り組み易く、学びを深めていけるような内容を検討していく。	
組織運営	⑨園務	教職員は、他教職員と協働し、計画的に園務を遂行しているか。	園務分掌を基に職員会で起案し、早めの計画実行に心がけた。実行後は成果と課題をまとめ、来年度に向けての改善を図った。必要に応じて分掌事務の担当や補助教諭の配置を見直したり、一人に仕事が集中しないよう分担し合ったりしながら、協力的に業務を遂行することができた。	3	3	引き続き、計画的な執行に努める。行事の見直しや会議の方法を見直し、業務の削減や効率化を検討する。	
安全管理・保健管理	⑩危機管理	園の危機管理及び幼児の安全や衛生の管理体制を全教職員が理解し、適切な対応に努めているか。	危機管理マニュアルを基に各種災害を想定した避難訓練を実施し、対応や役割を確認した。(水害時の訓練、引き渡し訓練) 園医や薬剤師と連携を図り、感染症の流行状況や情報収集に努め、基本的な予防対策を継続しながら衛生管理や細やかな健康観察に留意した。 怪我マップの記録から原因分析を行い、事故防止に繋げていくように努めた。	3	3	今後も感染症の対策などの情報収集に努め、全職員で共通理解を図り、危機管理意識を高めていく。ヒヤリハットシートへの記録分析を基に事故防止に努める。	
教育環境整備	⑪園地・園舎・遊具等の施設・整備	園地・園舎・遊具等の施設・設備を定期的に点検し、必要な改善・管理を行っているか。	日常の安全点検とチャックリストに基づく毎月の点検に基づき、市の担当課と連携しながら、速やかに修繕を行い、環境整備や改善に努めた。(園用トイレ、園舎建具修繕など)老朽化による遊具の腐敗が進行している。安全な遊び場を保障するため、遊具環境の整備を年次的に更新する必要がある。(ジャングルジム改修依頼中)	3	2	日常の安全点検に努め、改善・管理を継続する。引き続き、市との連携を図り、園舎内外の環境の充実に向けて要求していく。 特に園庭の遊具に関しては、安全面からも早急な改善が必要であるという運営協議会の意見があり、左記の評価となっている。	

※評価基準 4：十分達成している 3：概ね達成している 2：改善を要する部分がある 1：大いに改善を要する